

# 文 國 大 子 女

第百三十三号

平成十五年六月発行

ある矢取地藏をめぐる覚書……………	中 前 正 志 (一)
付『弘法大師御伝記』の挿絵と北摂感応寺所蔵「弘法大師絵伝」	
紹介『 <small>甲斐 徳本</small> 喰合禁物集』……………	八 木 意 知 男 (七)
―養生和歌の一齣―	
彙 報……………	(六)

# 彙報

## 研究室だより

○国文学会行事として、次の諸行事が実施されました。

新入生歓迎行事

四月十九日(土) 午後2時～

南座歌舞伎鑑賞教室

忍夜恋曲者 — 将門 —

春季公開講座

五月二十二日(木) 午後4時30分～

講題 『風土記』のよみかた

講師 植垣節也先生(兵庫教育大学名誉教授)

優秀論文発表会

六月七日(土) 午後1時～

「猫の事務所」考

現代京都における複合名詞のアクセントについて

宮田直子

本発表会は五月三十一日の予定でしたが、台風の影響により、一週間延期しての実施となりました。当初発表予定の

「紫苑の香りをめぐって—『源氏物語』「野わき」の巻」(豊田さや香)は、日程変更のため、発表者参加不能となりました。

○一年間の国内研修に出られていた徳永道雄先生が研修を終え、帰任されました。

○本年度の国文学教室・国文学会の運営には、笹川祥生先生(国文学科主任・国文学教室主任)、中前正志先生(国語・国文専攻主任)、田上稔先生、坂本信道先生の諸先生が、あたっておられます。

○本学名誉教授、藤本一恵先生が、二月二十日、逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

## 二〇〇二年度修士論文題目

後深草院二条と五部大乘経

須田亮子

『慊堂日歴』にみる松崎慊堂の門人教育論

橋場愛

吉行淳之介「暗室」論

沓抜淑子

西鶴中期作品の研究

細川深春

—未刊の書『甚忍記』をめぐって—

匂宮三帖の執筆位置

三輪佳栄

都賀庭鐘『英草紙』論

村田知子

—その時代性と周辺作品との関わりについて—

二〇〇二年度卒業論文題目

古 代

『古事記』の刀剣名考

稲葉 世里子

『紫式部日記』の消息文的部分の一考察

青木 君江

『伊勢物語』—男の人物像について—

安原 貴子

相聞歌における「髪」について

岩田 恭美

『夜の寝覚』論

穴井 里美

題詞「和歌」(四二番歌・一六五七番歌)考

串田 真由美

—中の君の心の在りかについて—

木下 真理子

中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子の相聞歌群について

田口 あゆ

『源氏物語』紫上の立場

木下 真理子

—宅守配流の原因について考察する—

—紫上の妻としての立場は、どのようなものであったのか—

鏡王女の贈答歌をめぐって

服部 ひと美

『源氏物語』朧月夜論 —その人物像を考察する—

佐々木 寛子

—女歌としての特徴を探る—

星出 あゆみ

今昔物語集卷二七第一四話の結末について

園田 紀子

『万葉集』における月夜の梅

伊藤 加奈子

—標題による考察—

花山院の研究

奥田 英美

明石の君の「本音」について

谷川 美幸

『御裳濯河・宮河歌合』底本論考

—『神風』『勢州』における—

紫苑の香りをめぐって

豊田 さや香

—『神風』『勢州』における—

—『源氏物語』「野わき」の巻—

『後撰和歌集』中の万葉歌の考察

安部 宏美

『源氏物語』初音の巻について

長束 登希

昔の人の袖の香ぞする考

上田 紗代

—作者はなぜ光源氏を明石の御方に泊ませたのか—

—古今和歌集一三九番歌を中心に—

『源氏物語』における男踏歌

古川 千華子

『讃岐典侍日記』解釈

中川 彰子

『源氏物語』花散里の人物像

堀内 まど香

—「けくにかしてめす」の一文をめぐって—

「女」と「母」—本当の姿とは—

『たまきはる』の主題

中瀬 圭乃

宰相中将の「とりかへ」—理想の女性像と女君—

三野 由希恵

「墮天人の住処」

法橋 佐苗

—女主人公の居所変更理由の真相—

土佐日記の「亡児」についての考察

荻田麻子

『水鏡』の執筆意図

三宅順

『枕草子』における清少納言の季節観

北沢珠紀

『徒然草』に見られる兼好の人間観

服部恵美子

秋好中宮の入内構想時期の考察

土井麻由美

—友人論を端緒として—

精松由記子

中世

『建礼門院右京大夫集』についての一考察

小野久美子

『太平記』の描く死

臼井祥代

—主題をめぐって—

—北条方と宮方、それぞれの死—

式子内親王A百首における「花」への思い

西川千春

『太平記』と落首

平野協子

—「かをる」を通して—

『太平記』における漢籍の引用章句について

熊代美帆

西行生涯の結句について

藤岡美穂

『三人法師』論 —「半出家」について—

野村佳代

—「こぎゆく跡の浪だにもなし」に秘められた想い—

渋川版『御伽草子』の子ども像

岸田由里子

良源について

阪田かおり

『平家物語』における義仲像

村上陽子

近世

—語り物系と読み物系の比較—

『日本永代蔵』考 —その主題について—

尾崎亜紀子

敦盛説話考

田口沙織

『春雨物語』「死首咲顔」論

近藤玲

義経の辿った道 —阿波より屋島に至るまで—

藪下陽子

『雨月物語』「菊花の約」考

竹内直子

「北国落ち」その内なる意義

村田悦子

西鶴作品における堺

谷奈穂

—『義経記』における一考察—

西鶴の描くお七像

寺岡裕子

『とはすがたり』における女性と出家

丸尾奈津子

—『天和笑委集』との比較において—

—後深草院二条の生き方—

『西鶴諸国ばなし』論

則岡敬子

西鶴仏神観

平尾 さやか

近松心中物道行における自然描写の効果

寺崎 有美

—『好色五人女』巻三「中段に見る曆屋物語」を核として—

近松の心中場面における男女の心残りについて

東藤 一恵

『雨月物語』における執着

前田 美恵

『好色一代男』の上方版と江戸版について

樋口 郁美

—「夢心の鯉魚」を介して—

『大経師昔暦』小考 —登場人物を中心に—

福西 有梨子

『南総里見八犬伝』試論 —八犬士の光と闇—

松倉 裕子

『女殺油地獄』小考 —河内屋与兵衛を中心に—

平林 美帆子

『武道伝来記』論 —西鶴の描いた武士像—

山根 五鈴

近松心中最期場考

宮内 裕子

『南総里見八犬伝』小考 —信乃と浜路の物語—

渡邊 里美

『心中二枚絵草紙』小考

井上 美穂

『春雨物語』論

安西 真智子

—『曾根崎心中』からの変化—

赤本『再版桃太郎昔語』小考

財津 小百合

西鶴初期俳諧考

森田 加奈子

—子どもへの視線について—

『雨月物語』小考

鈴木 梨絵

『春雨物語』「目ひとつの神」考

田代 倫子

—巻之三「吉備津の釜」における磯良をめぐる—

—怪異描写に込められた思い—

『曾根崎心中』小考 —お初の心情を中心に—

清谷 奈津子

『薩摩歌』の中の変装

太田 なぎさ

『心中天の網島』小考 —女同士の義理—

田川 央子

『心中重井筒』小考 —妻の劇として—

片岡 寛子

近松世話浄瑠璃における煙草の役割

亀島 あい

近 代

『好色一代男』、『諸艶大鑑』の遊女について

黒岡 亜紀

〈絶対的〉空間とその趣向

伊藤 美鈴

—遊女評判記との比較を中心に—

—泉鏡花「外科室」論—

『長町女腹切』小考 —主題と叔母—

近藤 基子

田澤稲舟「しろばら」論

白石 美幸

『義経千本桜』小考 —「狐忠信」の作劇法—

大快 和子

「琵琶伝」の真実 —謙三郎の隠された想い—

武藤 裕香

啄木詩の読み方

—「はてしなき議論の後」における—

矢下 陽子

芥川龍之介「秋」論

伏見 望

「うつせみ」の独自性について

吉野 玲架

『永すぎた春』私論

明星 美絵子

「風立ちぬ」論

石部 美佳

—昭和三十年代の恋愛観・結婚観—

山村 美希

—「生」と「死」と「愛」について—

板倉 久美子

夏目漱石「坊っちゃん」

横山 麻子

「春」考 —彷徨う岸本を通して—

市岡 沙登代

—坊っちゃんの孤独と下女・清の存在—

渡辺 規子

吉本ばなな作品論 —喪失からの癒し—

今村 菜摘

森鷗外の『雁』に隠された物語

兼安 瞳

幸田文「おとうと」論

大黒 文子

—《語り手》「僕」とお玉を主人公にして—

志賀直哉「赤西蠣太」 —小説と脚本の比較から—

—《小説》ということ意識して—

岡島 郁

『河童』論 —ガリバー旅行記との比較から—

松谷みよ子『モモちゃんとアカネちゃん』シリーズ

「羅生門」論 —羅生門と鬼—

角 美樹

—「離婚」の表現を中心に—

「風立ちぬ」に関する一考察

小説家正岡子規のみなおし

鹿野 静恵

中島敦「悟浄出世」に関する一考察

「注文の多い料理店」研究

—『曼珠沙華』を中心に—

木村 ちひろ

—「氷河鼠の毛皮」からの解釈—

偶然における意味

—「剃刀」「氾の犯罪」「城の崎にて」において—

工藤 真知子

堀辰雄「母」への「麥藁帽子」

川端文学における「鏡」の持つ意味について

「高瀬舟」 —《知足》と《安楽死》—

中村 沙織

「猫の事務所」考

国木田独歩「春の鳥」考

『こころ』論 —もう一つの「遺書」—

西田 亜沙美

高村光太郎『智恵子抄』論

漱石における《夢》について

—現実・過去・理想—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

秦 はる香

—詩の美化について—

古谷 梓

—詩の美化について—

名元 麻貴

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

—詩の美化について—

「土神ときつね」論 — 罪と救済の構造 —

水谷 容子

応答語の機能性

竹内 菜穂

「手袋を買ひに」に関する一考察

松田 典子

「けり」と「き」 — 『竹取物語』から見た —

浅原 直美

全てに感謝しての自己活用

上田 桂

島崎藤村作品における直喩について

稲葉 めぐみ

— グスコープドリルの動機づけ —

— 「破戒」・「春」・「家」より —

稲村 絵美

近松浄瑠璃の義太夫節

稲村 絵美

漢 文

節付け「スエテ」における

雲井龍雄の生涯と詩

加藤 寿絵

江戸吉原・京島原・祇園の尊敬表現

大内田 麻美

山片蟠桃の無鬼論について

倉谷 有紀

笑いの擬音語・擬態語考察

中村 陽子

中島敦における南方の意味

福井 渚

— 漱石作品における笑いの表現 —

中村 陽子

李白詩における月

藤井 祐美

現代京都における複合名詞の

宮田 直子

蠣崎波響の詩風の変遷について

矢野 志保美

アクセントについて

宮田 直子

売茶翁精神の継承

山崎 千草

助動詞タリ・ケリに関する一考察

片山 加代

— その変容と性質について —

国 語 学

現代語終助詞の使用状況について

若代 由美子

副詞の語形成

大橋 美喜

— 人物設定による相違を中心に —

対話 — 言葉をうけわたすこと —

藤木 香奈

和歌山言葉

青石 千映

語の世界と意味記述 — 着・脱の語を中心に —

右田 曜子

— 和歌山市方言の現状と未来 —

現代語表現における敬語性

今岡 留美

「若者言葉」と女子大学生

磯田 裕子

— 誤用・乱れとして扱われる言語表現の持つ敬語性 —

現代日本語の擬態語について

関口 愛

京言葉について

大嶋 美由記

若者言葉における副詞「全然」

―強調表現としての機能―

亀井美穂

大阪方言の現状

―大阪府北摂地域における残存と衰退―

吉田香織

北海道内陸部方言の現状

―札幌市・更別村での調査―

木本里美

キャンパス言葉について

―京都女子大学文学部国文学科における―

清川ひとみ

京都の方言について

福井県方言の現状

京言葉の現在

徳島県の方言

場面による言葉の使い分け

―京都の学生におけるアンケート調査より―

方言と標準語の使い分けについて

山口県における若者の方言の衰退と現状

大阪方言の現状

「若者ことば」とその実態

―京都女子大学生によるアンケート調査から―

「若者言葉」について

―京都女子大学生へのアンケート調査より―

諺の認識

山嶋綾乃

村上桃子

宮下友貴

丸山瞳

益田彩子

深本舞

深川春香

日根通世

西澤実紗

中出真貴

小東依里



女子大國文

第百三十三号

平成十五年六月十五日 印刷  
平成十五年六月三十日 発行

〒六〇五人五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼  
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五・五三一九〇七六

FAX 〇七五・五三一九一三〇

振替 〇二〇八〇一五二三二四

〒六〇三八四 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五・四二一四一〇八代

FAX 〇七五・四三三六二八二